

「全体とすべし」第一集

ベルゼバブが孫に語つた物語 人間の生に対する客観的で公正な批判

ゲオルギー・イヴァノヴィッチ・グルジエフ 著

郷 尚文 訳

郷 尚文

東京外国語大学卒業後、海外営業職ほかを経てフリー・ランスの翻訳者となる。一九八八年に『ベルゼバブ』の翻訳を開始し、以後、グルジエフに発する伝達の流れにくみする複数のグループおよび個人と接触をもつ。一九八九年にイングランドの Osho Commune International を訪れた後、グルジエフに由来する舞踏・体操・エクササイズを集めた「ムーヴメント」をめぐる回廊・ワーク숍での試みに関与。一九九七年よりムーヴメントを中心とするプログラムを日本および海外で主導。二〇〇一年に『覚醒の舞踏～創造と進化の図鑑』(市民出版社)を発表。二〇一四年にグルジエフ全集、二〇一七年にグルジエフ総論シリーズの発行を開始。二〇一二年、キヤサリン・マンスフィールドの生涯と作品を取り上げた『グルジエフ総論』メソテリック』を発表。以後、マンスフィールド作品の翻訳にも着手。

<http://gurdjief.la.coocan.jp/>

目次

「全体として」三部作	4
好意的助言	4
第一章 第一巻	5
思考の喚起	5
第二章 プロローグ—ベルゼバブは「いかで」われわれの太陽系に来たのか	28
第三章 宇宙船カルナーノの落下における遅れの原因	31
第四章 落下の法則	36
第五章 大天使ハリトーンの発明	38
第六章 永久運動	40
第七章 存在に伴う眞の義務に田覚ぬいじ	42
第八章 なまいきなベルゼバブの孫、ハシマー、あつかましくも人類を「なむへじじや」と呼ぶ	44
第九章 月の生まれた理由	45
第十章 なぜ「人間」は人間ではないのか	48
第十一章 現代の人間の奇妙な精神——その激しやすさ	51
第十二章 大騒動のそもそもの原因	53
第十三章 なぜ人間の理性には夢が現実として映るのか	56
第十四章 おつたくぱいとしない見通しの始まり	58
第十五章 ベルゼバブの惑星地球へのせざむの下降	60
第十六章 《時間》の相対的理解	65
第十七章 大いなる不合理——ベルゼバブの意見では、われらが太陽は照らすが、熱や光	71
第十八章 前代未聞の大いなる実験	78
第十九章 ベルゼバブによる惑星地球との二回目の下降	91
第二十章 ベルゼバブによる惑星地球との三回目の飛行	105
第二十一章 ベルゼバブのはじめてのハイアル訪問	114
第二十二章 ベルゼバブのはじめてのナガラム訪問	125
第二十三章 ベルゼバブの四回目の個人的滞在	132
第二十四章 ベルゼバブの惑星地球への四回目の飛行	153
第二十五章 ベルゼバブの惑星地球での四回目の個人的滞在	168
第二十六章 大聖者アシタ・シマラシ、天より地球に遣わされた『狀況の惑星』と題されたレゴミーズ	171
第二十七章 大聖者アシアタ・シマラシが人間の存続のために設立した団体	177
第二十八章 大聖者アシアタ・シマラシが神聖な労働の成果のすべてを破壊した張本人	188
第二十九章 第一巻	198
第三十章 過去の文明の果実、ならびに現代の華	198
第三十一章 ベルゼバブの惑星地球での六回目にして最後の滞在	248

第三十一章 催眠術	264	第四十七章 公正なる精神によるとして当然の結果	537
第三十二章 プロの催眠治療師としてのベルゼバフ	274	第四十八章 著者より	542
第三十四章 ロハト	280		
第三十五章 宇宙船カルナークの宇宙船トロの歴史	308		
第三十六章 ドイツ人についてやわらかい	310		
第三十七章 ハーナー	312		
第三十八章 宗教	327		
第三十九章 聖惑星ペーカーナ	350		
第三十章 人々がもつておるの根本法則くたばくバルハノクを尋ね やつて忘れたか	381		
第四十一章 ブハラのダルヴィッシュ、ハジ・アズベク・ヌーハ	408		
第四十二章 アメリカのベルゼバフ	429		
第四十三章 人類の周期的相互破壊に関するベルゼバフの調査、やつて戦争に 關するベルゼバフの意見	485		
第四十四章 人間の理解する正義なるものせ、ベルゼバフの意見によれど、客觀 的な意味において、呪われた幻影にすれど	512		
第四十五章 ベルゼバフによれば、人間にやる自然からの電氣の影響、なんらか の利用による破壊は、人間の寿命を縮める大きな原因のひとつである	524		
第四十六章 人間に關する知識を開拓するにあたってベルゼバフが採用した形 式と順序の重要性についての、ベルゼバフ自身による孫への説明	531		

※ 翻訳の底本には一九五〇年発行の英語版を使つておますが、かなりの数にのぼる既知の誤植や誤訳を修正したほか、一部の箇所では論理的叙述と文法的一貫性の点でおおむねようすぐれた一九九二年版（ハーナー語版ペーパーの英訳）を参照しておます。この物語に独自のカタカナ語や登場人物名の発音はロハト語での表記およびグルジヒの回廊した朗読会での発音指示に関する箇所トータも参考にしておいたため、語頭の h と語中の kh などについて英語での表記と一見して異なることがあります。

「全体とすべて」 三部作

第一集——『人間の生に対する客観的で公正な批判』あるいは『ベルゼバブが孫に語った物語』

第二集——『注目すべき人々との出会い』

第三集——『生は《私が在る》ときのみリアルである』

すべては、完全に新たな論理的展開の諸法則にのつとり、以下に掲げる三つの主要な課題の達成をその厳格な目的として書かれた。

第一集——過去の幾世紀にもわたって読者の精神と感情に根を下ろした、世界のすべての事柄についての信念と見解とを、非情にも、いかなる妥協もなしに破壊すること。

第二集——新たな創造のために必要な素材に読者を馴染ませ、その健全さとすぐれた性質とを明らかにすること。

第三集——読者の精神と感情において、現在の彼が知覚するような幻の世界ではなく、現実の世界の、実証可能にして夢ならざる認識が生まれるのを助けること。

次に、隣人の幸せのために。

そして最後に、自分自身のために」

……という格言の主旨にのつとり、すでに出版の準備が整った本書の最初のページに、私は次のような助言を書き加えることの必要性を認めるものである。

「私の書いたものをそれぞれ三回ずつ読むように。

一回目には少なくとも、あなたがあらゆる現代的な書物や新聞を読むときに機械的にしているようなやりかたで読みなさい。

二回目には、まるで誰かに聞かせているかのように。

そして、三回目になつてから、私が書いたものの真髓を究めようと努力しなさい

その後においてのみ、あなたは、私が書いたものに対する、あなただけにふさわしい、あなたのものである、かたよりのない判断が生まれることを期待できる。また、やはりその後においてのみ、私の願いはかなえられ、あなたは、あなた自身の理解により、私があなたに用意した特別の恩恵を手に入れることができる。そして、それがあなたにとって可能であることを、私は、わが存在の全体をもつて祈るものである。

好意的助言

（出版の準備がすでに整い、本書の原稿が印刷所へと発送される直前に、著者によつて即興的に書き加えられた）

耳から受け取つた、あるいは本から受け取つた新しい印象が現代人のなかにどれほどてんではばらばらの認識をもたらすかについて実験を通じて解明していくなかで私の行つた数々の推理と論証に基づき、また、私がいましがた思いだした、はるかな古代から現代まで伝わるある格言、すなわち……

「どんな祈りであれ、それが《高次の諸力》に聞き入られ、しかるべき答えをもたらすためには、三回唱えられなければならない。

まず、両親の魂の幸せと平安のために。

第一卷

第一章 思考の喚起

責任ある年齢に達して以来のわが独特の人生を通じて私のなかに形成された数々の確信のひとつとして、どの時代にも、地球上のどこにおいても、理解力の発達においてどのような段階にある人々の間にも、各種の理想の実現をどのような形で求める人々の間にも、何であれ新しいことを始めるときには欠かすことなく、どんなに無知な者にも理解できる特定の言葉を声に出して、さもなくば少なくとも心のなかで唱えるという習慣が見られる。この言葉には「時代」とに異なる表現が与えられてきたが、今では次のような表現になつてゐる。

「父と子と聖霊の御名においてアーメン」

いま私にとってまったく新しいものであるこの事業、すなわち著述業に取りかかるにあたつても、やはりこの言葉を発することによってはじめとし、しかもこれをただ口にするだけではなく、とりわけはつきりと、むかしトウルーズの周辺に暮らした者たちが「全面的に表現されたイントネーション」と呼んだものをもつて発音するのは、このような理由からである。もちろん、

こうした全面的な表現の能力が私の全体のなかに生まれられたのは、この種の表現に備えて私のなかに形成され、すでに確固たるものとなつている素材のおかげ以外の何ものでもない。おおむね人生の準備的年代において人間の本性に形成されるこのようないくつかの要素は、のちの責任ある人生において、このような言葉を、それにふさわしい活度をもつて発音する能力を生み出すのである。

「このような手順を踏んで始めた以上、今や私はすっかりくつろぎ、宗教道德についての現代人の理解をまねて、この新しい事業の先行きが「まるで自動ピアノのように」「順調であろう」とを、すべての疑いを離れて確信するのも悪くはなかろう。ともあれ、私は」のようにして始めたのであり、その後の進展についてどうぞお読みください。

りあえずのところ私に言えるのは、かつてある盲人が口にしたのと同じ言葉、つまり「見てみなければわからない」というひとことだけである。

何よりも先に、私は自分の手、それも右の手を……つまり、私を最近訪れた不運な出来事のために今のところ少しばかり傷ついてはいるが、ほんとうに私のものであり、生涯を通じて私を一度も裏切つたことのない右の手を、これも私のものであるわがハート（ただし、私の全体のなかのこの部分がどうほど私だけに忠実かについてはここで説明する必要はないだろう）の上に置き、あからさまに打ち明けることにしよう。私は個人的には本を書きたいなどとこれっぽっちも思っていないのだが、私自身とはまったく無関係のあれこれの状況が私に書くことを迫っている。このような状況が偶然に生じたものなのか、それとも外的な諸力によって意図的に創造されたものなのかを、私はまだ知らない。私にわかるのはただ、「のような状況が私に書く」とを迫るのは、たんなる「まあまあ」な作品、たとえば読者を読みながら眠らせるようなものではなく、ずつしりかさばる大冊だということである。

ともかく、始めることにしよう……。

だが、何から始めたものか。

ああ、なんということだ。およそ三週間前、私に出版を運命づけられたさまざまな考えに与えるべき構成や展開について思いをめぐらせながら、やはり何から手をつけてよいのやらわからなかつたときにも味わつた、あのきわめて不愉快で、なじみがたい感覚が、ふたたびくりかえされようとしているのか。

そのときに味わつた感覚をいま言葉にするなら、「あふれでる思考に溺れる」との恐怖」とでも言つしかない。

そのときにはまだ、「の不愉快な感覚を鎮めるために、私は、現代人同様、私にも遺伝されている、あの邪悪な特性の力を借りることもできた。この特性はわれわれ全員に遺伝されており、おかげでわれわれは、望むことはなんであれ、なんら良心の呵責を感じることなく、「明日まで」延ばすことができ

るのだ。

そのときの私にとって、そのように延期するのはじつに簡単なことだった。実際に著作を始める前の私は、時間はいくらもあると思っていたのだから。

しかし、そのような延期が不可能となつたいま、私は確実に、いわば「たとえ張りさけるとも」仕事にからねばならない。

それにしても、いったい何から始めたものか……。

ははあ……わかっただぞ！^{ユウカリカ}

これまでの人生のなかで私が読んだほとんどの本は前書きで始まっている。

よつて、私のこの本も、前書きに似たもので始ることにしよう。

「似たもの」というのは、おおよそわが人生のプロセスのなかで男と女の区別がつくようになって以来、私はすべての、完全にすべてのことを、『自然』の富の破壊者となつた私と同類の二本足の生き物たちとは違つたふうにしてきたからである。したがつて、この本もまた、他のどんな作家もしないようなやりかたで始めるのが当然であり、そうすることによつて、私は同時に、すでに自分にとって義務的なものとなつた原則に従つていることにもなる。私は、慣習的な前書きのかわりに、ひとつの「警告」をもつてこの本を始めることにする。

かりにそれが、私の生理的原則と心理的原則のみか、私の「意地悪」な原則にも逆らうことなく、しかも——もちろん客観的な意味で——きわめて誠実であるという理由だけによるものだつたにせよ、これはまことに意にかなつたやりかたである。なぜなら、私の本を読むことにより、ほとんどの読者の内側では、あどけない夢をしかもたらさない数々の想念が黙らされることになり、そのため読者は、読者の現在の生活を飾る美しいものや、そういうものを将来において獲得する可能性ばかりか、読者の所有するすべての「富」を得られたものかを問はず、しかも遅かれ早かれいはずはだれにでも起つるようゆつくりとではなく、たちまち完全に失うであろうことを、私は、私をよく知る人々とともに、疑いようもない確率で予測するからである。

プロの作家たちは、本の「こうした導入部を読者への呼びかけによって始め、そのなかに、とほうもなく大げさで、「蜜のように甘く」、「ふくれあがつたフレーズをちりばめるのがふつうである。

この点においてのみ、私も彼らを見習つて、私の本を似たような呼びかけによって始める』ことにする。ただし、私はこの呼びかけが彼らの書くような「甘い」ものとはなりないよう注意しよう。このような呼びかけを「甘く」するために彼らが用いるのは悪質な知つたかぶりにほかならず、彼らはそれによって多少なりとも正常な読者の感受性をくすぐろうとするのだから。

わが親愛なる、誇り高き、意志堅固たる、そしてもちろん、とても我慢強い紳士諸君。そして、わが尊敬する、可愛らしき、公正なる淑女の方々。そして——許してくれたまえ、だいじなひとことを忘れていた——わがけつてヒステリックではない淑女の方々よ。

わが人生の最終的な一段階において生じたもうものの状況によるものとはいえ、私はいま、数冊の本を著そうとしており、私のこのようない意図をあなたがたにお伝えできるのは私にとって晴れがましいことである。しかしながら、これまでの人生のなかで本、あるいは「啓発的記事」なるものを一度も書いたことがないのみか、「文法性」なるものを必ず守らなければいけないような手紙一通さえも書いたことがないために、私はいま、プロの作家にまでなろうとしているのだが、作家が守ることになつてゐる規則やら手順やら、あるいはいわゆる「お行儀のよい文学的言語」についての訓練が私にはまったく欠けており、そのため私には、普通の「商標つき作家」が書くのとは、つまりあなたがたにとつてはすでにご自分の体臭と同じぐらい身近なものとなつてゐるはずの彼らの文体とはまったく違つたふうに書くことしかできない。

私が思うに、これによつてあなたがたが直面する最大の困難は、おそらく次のことによつてあなたがたがまだ幼かったころ、あなたがたのなかには、あらゆるたぐいの新しい印象を能率よく処理する自動的な機能が組み込まれ、それが今となつては、あなたがたの精神全般と理想的な

までに調和してしまっている。その「おかげ」で、今のあなたがたは、「」自分の責任ある人生において、どんな個人的努力の必要性も感じていない。

正直なところ、私がこの打ち明け話の主題と見なすのは、作家としての規則や手順に関する私の無知についてというより、現代生活を営むうえで作家だけではなく、あらゆる普通人にとつて欠かせないものとなつた「お上品な文学的言語」に関する私の無知についてである。

前者、つまり作家が守るものとされている規則やら手順やらに関する無知については、私はたいして遺憾に思っていない。

というのも、このような無知は、すでに人々の間であたりまえのことになつてゐる。「」のような無知が生まれ、いまや世界中にはびこっているのは、あのとほうもない新病のせいである。この二十年ないし三十年の間、三つの性からなる全人類のなかで、とりわけ半分目を開けたまま眠りこみ、顔はあらゆる種類のにきびにとつての肥沃な土壤となつた連中の多くが、どういうわけか、この新病に感染することになつたのだ。

この病気は次のように発病する……もしもこれにかかる患者がわずかに彼女、あるいはそれは、疑いようもなく、あれこれの「啓発的記事」または一冊の本を書き始める。人類のこの新しい病気と地球上でのその蔓延について熟知している私は、あなたもお察しのとおり、学識ある「お医者さま」が「免疫」と呼ぶものをあなたがすでに獲得しており、したがつて作家が守るべき規則や手順に関する私の無知に対しても激怒することはないと考へてゐる。この理解に従つて、私は先に触れたような文学的言語に関する自分の無知をこの打ち明け話の主題とすることにする。

自己正当化のため、またおそらくは、現代生活に欠かせないものとされているこの種の言語に関する私の無知に向けての、あなたがたの醒めた意識の側からの非難を弱めんがため、私は心を謙虚にし、頬を恥ずかしさのあまり真つ赤に染めて、白状せねばなるまい……。私も子供のころにこの種の言語を仕込まれ、責任ある人生に向けて私の準備を整える仕事を受け持つた年長者的一部などは、そのためにどんな脅しを用いることもいつときも「ためら

つたりちゅうちょしたり」せず、全体としてこの種の言語を構成するところの一連の「ニュアンス」を私に「丸暗記」させたりしたのだった。だが、読者にとってはもちろん不幸なことに、丸暗記したもののが私のなかに残つたものはひとつもなく、現在、私の作家としての活動に影響するものは皆無である。

これはつい最近になつてわかつたのだが、私のなかに何も残らなかつたのは、私のせいでも、私の尊敬に値する、あるいは値しない先生がたのせいでもない。私をこの方面で教育するために人々が注いだ努力は、「神のお創りになつたこの地球」に私が出現した瞬間に起きたある出来事のために、どれもこれもうまくいかないことに決まつていてある。この出来事について、ヨーロッパで有名なオカルチストがとても微妙な「心理学／生理学／天文学的」調査とかいうものの後に説明してくれたことによれば、その瞬間、となりの家のエジソン蓄音機から生じた音の振動が、家のびつこのきちがい山羊が窓ガラスにあけた穴を通つて侵入し、しかもそのとき、私の産婆はコカインのしみたドイツ製の錠剤を、それも「まがいもの」ではないやつを、音楽にあわせて、ろくに楽しみもせずにしゃぶつていたとのことである。

じつをいうと、これはドイツのヘル・ストウン・ブシン・シユモーゼン教授の方法による長い熟考の後に思いついた推論なのだが、人々が日常的に体験するものではない、この珍しい出来事のほかに、現在の私のこのような状況の原因となつたのは、その後の準備的年代と成人期を通じての他人との交際において、私は本能的あるいは自動的に、そしてときには意識的すなわち私の流儀として、この種の言語の使用を避けてきたということである。そしてこのような些細な——いやおそらくは些細ではない——点に至るまで、私の流儀として、この種の言語の使用を避けってきたということである。そしてこのこと全般には、準備的年代を通じて私の全体のなかに育まれた三つの素材の影響が反映されている。この三つの素材については、この章の少しばかり後のほうで触れることにしよう。

何はともあれ、アメリカの広告塔ながらに、四辺からのこうこうたる光によつて照らし出された本当の眞実、しかも今となってはどんなペテン師の悪知恵をもつても「まかしがたい事実として、寺院舞踊のなかなかすぐれた

教師として近頃では多くの人々に知られるようになつたこの私は、今やプロの作家に転向し、しかも子供のころから「何をするときにも必ずそれを大量にする」ことが習慣となつてゐる私であるから、もちろん大量に書くことになるわけだが、それにも関わらず、読者もお察しのとおり、私にはそのためには必要な、練習の成果として人が自動的に獲得し、自動的に効果を發揮するところの能力が欠けており、よつて私は、私の考え方のすべてを、どんな文学的操縦も「文法的知つたかぶり」も施すことなく、生活によつて確立された普通の単純な日常的言語で書くことを強いられている。

しかし、轟はまだ満たされていない！……まだいちばん重要な問題にけりがついていないのだから。つまり、どの言語で書くのかについて。

(ホジヤ・ナスレディンとも呼ばれるムラ・ナスレディンは、ヨーロッパやアメリカではほとんど知られていないようだが、アジア大陸のどんな国でも、その名はあまねく知れわたっている。この伝説的人物は、アメリカのアンクルトムやドイツのチル・オイレンシュピーゲルに相当するもので、知恵ある格言にも似た、東洋で人気のある無数の小話は、昔から伝わるものも、最近になつてから追加されたものも、現在でも過去においてと同じように、ムラ・ナスレディンの作とされている。)

ロシア語がたいへんすぐれていることは否定できない。私はそれを好きでさえいる……。もっともそれは、世間話をしたり、だれかの家柄について噂したりといった用途に限つてだが。

ロシア語は英語と似たようなものだ。英語もとてもすぐれていますが、それもまた、「喫煙室」の安樂椅子に腰をかけ、さらにもうひとつ安樂椅子に足を投げ出して、オーストラリアの冷凍肉や、インド問題について話したりといった用途に限つてのことである。

「」の二つの言語は、モスクワで「ソリヤンカ」と呼ばれるスープに似てい
る。そのなかには、あなたと私を唯一の例外として、お好みのものが何であ
れ……シエラザード姫の「食後用のチエスマ*」までも放りこまれる。

*原注：「チエスマ」はヴェールのこと

さらに言つておくべき」として、私が若年時代において偶然に——いやおそらくほんとのところは偶然ではなく——過ごした環境のために、私はこれまでの人生で、とりわけ真剣に、そしてもちろんいつも自分自身に強いながら、とてもたくさん言語の会話や読み書きを覚えなければならず、それもかなりの流暢さが要求されてきたため、私が意外にも《運命》によって強いられることになったこの職業に従事するにあたっても、もしも練習によつて得られる「自動性」の助けを借りないことに決めたのなら、自分が得したこれらの言語のどれを使用してもよかつただろう。

しかし、私が賢明にも、自動的に獲得され、長年の使用によつて便利なものがとなつた自動性の助けを借りることにするならば、著述に使うことのできるのは、ロシア語とアルメニア語のどちらかに限られてしまつ。これまでの二十年から三十年にわたつて私の過ごした環境が、他人との交際につたつてこのどちらかの言語の使用を要求するものであつたため、私はこの二つの言語について、より多くの練習を積み、自動性を獲得することとなつたからだ。やれやれ！……このように決めておなが、一般の人々の間ではめつたに見られない、わが精神の特異な一面が、早くもわが全体を苦しめてやまない。ほとんど円熟期といつてもよいようなこの年齢において私をこれほど不幸にする最大の要因は、私がまだ小さいころに、私の独自の精神には、いつでも、何をするにあつても、みずからの全体を民衆のなかで生まれたもろもろの格言の主旨に従わせようとする傾向が、現代生活を営むうえで何の足しにもならない他のがらくたといつしょに植え付けられていることである。

わが人生におけるこれと似たような——もつとも、はつきり限定すること
はできない——他の局面においてと同じように、今も、ほとんど冗談としか
思えないほど作りの悪い私の脳みそを「かけめぐって」いるのは、はるか昔
の人々の生活のなかで生まれたある格言である。はるかな昔から語り継がれ
てきたこの格言は、今では次のような言葉となっている。

「あらゆる棒に二端あり」

私が思うに、この不思議な格言に隠された基本的な考え方と、その本当の意味を知るには、多少なりともまともに思考する人間の意識のなかに、まず何よりも先に、ひとつの仮定が生まれなければならない。それは、この格言の土台となり、この格言に意味を持たせるもろもろの考え方の総体のなかに、幾世紀にもわたって人々の認めてきた真理が込められているという仮定である。それが説くところによれば、どのような現象から生じたものかを問わず、人生で観察されるすべての現象は、もしもそれ自体が別の現象のもたらす二つの正反対の結果の片方であるならば、この現象も、やはり必ず二つの正反対の結果をもたらさずにはいられない。たとえば、性格の異なる二つのものから得られた「何か」が光をもたらすならば、それは必ずその正反対の現象、つまり闇ももたらす。また、生物の有機体の中に、それと感じることのできるような満足をもたらす原因になるものは例外なく——もちろんやはりそれと同じことのできるようない——不満ももたらすのであり、これはどんなときにも、「どんなことにもあてはまる。

当然ながら、棒には二つの端があり、この格言では、その片方が良い方、もう片方が悪い方とされているのだが、この棒によってあらわされた幾世紀にもわたる知恵の結晶を今の問題にあてはめてみると、もしも私がこの本の執筆で、長年の習慣によってのみ人が獲得できる前述したような自動性を用いることにするならば、それはもちろん私自身にとつてはたいへん都合のことではあるが、この格言のいわんとするところによれば、読者にはその正反対の結果がもたらされるはずである。そして、良いことの反対が何であるかについては、たとえあなたが痔の持ち主でなくとも簡単におわかりになろう。

要するに、もしも私が自分の特権行使して、棒の良い方の先をとるならば、悪い方の先が「読者の脳天を直撃」するのは避けられないということだ。これはほんとうに避けられないことなのかもしれない。というのも、私がこの本のなかでおおいに触れようと思っている各種の哲学的問題のいわゆる「精髄」をロシア語で表現することはできず、一方、アルメニア語を使えば

それが可能なのだが、現代のあらゆるアルメニア人にとって不幸なことに、アルメニア語を現代的な考え方の表現のために用いることは、すでに実用的とは言えなくなってしまっている。

このような現実を前にして、わが内面の痛みをやらげるために言つておきたいのだが、青年時代、いろいろな哲学的問題に夢中になつていたころ、私がそのころに話すことのできた言語のなかでもつとも——母国語に比べてさえ——気に入つたのが、このアルメニア語だった。

そのころの私がアルメニア語をもつとも気に入つていた最大の理由は、それが独創的な言語で、近隣の、あるいは同族の言語となんら共通のものを持たないことだった。

博識の「言語学者」も認めるように、アルメニア語の保有するすべての音は、それぞれがこの言語に特有のもので、そのころの私の理解力をもつてさえ、この言語が、その国を構成する民族の精神にぴたりと呼応したものであることは明らかだった。

だが、過去の三十年から四十年の間に私が目撃したアルメニア語の変化は多大なものであり、その結果、大昔から伝わる独立した独創的言語にとつてかわつたのは、いまだに独創的にして独立していることは否定できないにせよ、「複数の言語の喜劇的」⁹「たまぜ」と呼ぶにふさわしい言語であり、その子音の総体が多少なりとも意識的で理解力のある聞き手の耳に入ったとすると、それはまさしく、トルコ語、ペルシャ語、フランス語、クルド語、ロシア語の単語の「音声」と、いくつかの「消化不能」にして不鮮明な雜音のこつた混ぜに聞こえるのである。

これとほとんど同様のことが私の母国語であるギリシャ語についても言える。私は子供のころにギリシャ語を話し、その「自動的連想喚起力の味わい」とでも呼ぶべきものを私はいまだに忘れていない。おそらく、望むものはなんであれ、私はギリシャ語で表現できる。ただし、単純な、いささか喜劇的な理由により、これを著作に用いることはできない。だれかが私の言葉を筆記して、それをさらに他国語に翻訳しなければならないのだが、いったいだけれどそれができるだろう。

断言するに、現代ギリシャ語の最高の専門家にしてみたところが、私が子供のころに吸収したギリシャ語で書いたものを一言半句たりとも理解しないはずだ。なぜなら、わが親愛なる「同国人たち」もまた、自分たちの会話においてさえ現代文明の旗手たちの真似をするためにはどんな犠牲をも辞さないという覚悟に燃えながら、ちょうどアルメニア人が、この三十年から四年の間、ロシアのインテリゲンチヤになろうとして彼らの母国語を扱ったのと同じやりかたで、私の母国語を扱つたからである。

遺伝によって私がその精神と本質とを知ることになつたあのギリシャ語と、現代のギリシャ人が話す言葉とは、ムラ・ナスレデインの言い草によれば、「釘の音と鎮魂歌」ほどにも違つてゐる。
さて、どうしたらよかろう。

ああ、心配しないでくれたまえ、私の知つたかぶりの購買者よ。大量のフランス産アルマニヤックとカイセリ産パストウルマ「パストラミ」さえあれば、私はこの困難な状況からでさえ、必ずや抜け道を見つける」とだろう。

私はこのようなことには慣れてゐる。

人生においてあまりにも多く逆境に巻き込まれ、そしてそれを克服してきたために、すでに「」のようなことは、私にとってあたりまえの「」とになつてしまつた。

問題の件についてはさしあたつてこのようにしよう……。ある部分についてはロシア語で、ある部分についてはアルメニア語で書くのだ。そうすることにためらいを感じないのは、私のまわりに「たむろする」連中のなかに、この二つの言語について「達者」な者が何人かおり、彼らが私のために、かなり手際よく筆記や翻訳をやってくれるものと、当面の期待を寄せているからだ。

いざれにせよ、あなたの心に銘記してもらうために——それも、あなたが習慣的にものを覚えたり、あるいはそれを頼りに自分の名譽にまでかけて誓つたりするようなありふれた記憶によってではなくに覚えておいてもらつたために——「」でふたたびくりかえすのだが、これからどんな言語を使おうとも、常にそして全面的に、私が「お上品な文学的言語」と呼んだものの使用

は避ける」とにする。

この点に関して非常に興味ぶかく、あなたがたの最上の知識愛を授けられる価値があり、しかも、あなたがたが通常に抱かれる概念よりもおそらくは高いところにある事実として、古代の神秘学者の言葉を借りて言うなら私の「惑星的身体」、それもどういうわけか主として「右半身」には、幼年期の早いころから——つまり、鳥の巣を壊したり、友人の妹をからかつたりする欲求が私のなかに生まれたと同じころから——ある本能的な、自分ではどうしようもない感覚が目覚めだし、そしてその感覚は、私がのちに舞踊教師となるころには一定の感情へと成長し、そしてさらに舞踊教師としての仕事柄、たくさんタイプの人間と接触するうちに、それは私のいわゆる「頭」で次のような確信となつた……この種の文学的言語を作り出す人々や「文法家」たちは、各自の母国語についての知識の点で、わが敬愛するムラ・ナスレデインが「連中にはオレンジの質について豚と議論するのがせいいっぽい」と呼んだ二本足の動物とまったく変わるとこらがない。

われわれの祖先と歳月によって育まれ、われわれに伝えられてきた良いものをだいなしにする「害虫」に成り下がつたこうした連中は、この叫びださんがばかりに雄弁な真実についてこれっぽっちの考えもなく、おそらくは聞いたこともないのだが、人間を含むあらゆる生き物は、その準備的年代において、古代のコルコラ人が「連想*の法則」と命名した法則に従つて自動的に精神を動かす傾向を獲得するのであり、あらゆる生き物そして特に人間の認識のプロセスは、例外なく、この法則の独占的な支配下に進行する。

* 訳注：「連想」は associations の訳。associations は、広い意味では「各種の結び付け」であり、「連想」よりも意味が広い。

のちに私のいわば「趣味」となつた問題、つまり人間の認識のプロセスについて、「」で思いがけなく触れることになつたため、この問題を説明するためにとつておいたのちの適当な箇所まで待つことなく、すでにこの第一章のなかでも、私が偶然に知る」となつたある重要な格言にまつわる、少な

くとも何らかの話をしてもよいものと考えて書つたが、かつて地球では幾世紀にもわたり、まわりの人々から「意識的な思考者」とみなされ、かつ自分でもそのように名乗る権利を獲得しようと大胆にも欲するようになつたあらゆる人間に對しては、その責任ある人生のまだ早いうちに、人間の認識には二つの種類があること」が教えられるのが習慣だった。そのひとつは思考による認識 (mentation by thought) であり、それに關するには、常に相対的な意味をしか持たない言語である。もうひとつの認識は、人間だけではなく、あらゆる動物に可能なものであり、「これを私は「形象による認識」 (mentation by form) と呼ぼう。

ほんとうなれば、あらゆる書物の正確な意味はこの二つの認識、つまり「形象による認識」によつても受け取られ、読者がすでに保有する情報との意識的な対決を経て吸収されるべきなのだが、ひとりひとりの人間のなかでこの種の認識の発達は、地理的、気候的、時間的な条件、つまり一般的に言えば、その人間の出生と成育のプロセスが進行した環境のすべてによって左右される。

そのため、まったく同じ事柄あるいはまったく同じ考えについてさえ、人々の脳のなかでそれに結び付いている「形象」は、土地、民族、環境の違いに応じて多種多様である。それらの「形象」は、その働き、つまり連想を通じて、当人のなかに一定の体験を呼び起し、それが各人特有の条件付けに応じた特定の画像的認識をもたらす。そしてこの画像的認識は、外面向的で主観的な描写にすぎないあれこれの言葉で表現される。

同じ事柄や思想を指示示すはずの言葉が、ほとんど常に、土地や民族が異なる人々によって、まったく異なつた特定の「意味」を与えられているのはこのためである。

言い換えるなら、特定の土地に生まれ育つた人間の内側にはその土地に特有の影響や印象がもたらした諸結果から生じたあれこれの「形象」があり、それらは連想を通じて特定の「意味」を呼びた体験を呼び起す。そして、もしもこの人間が、それから生じた認識や考えを彼にとつてはついに癖となり、かつ私がすでに述べたように主觀的なものとなつてしまつたあれこれの

言葉で表現するならば——別の環境で生まれ育つた聞き手のなかではそれらの言葉はまったく別の「意味」を帯びた「形象」に結び付いているため——当然、聞き手はそれらの言葉をまったく別の意味で受け取り、理解するに違いないのである。

異なる民族に属する人々、あるいは異なる土地に生まれ育つた人々が意見を交換するありさまを、その場で注意して、公正な観点から觀察しさえすれば、「これはいとも簡単に立証できる。

さて、私の知つたかぶりを買いいかつて、元氣あふれ、意氣さかんなる諸君。私が「プロの作家」がふつうに書くようなものを書かないばかりか、それとまったく正反対のものを書く「としている」ことを警告したところで、さらにもうひとつ忠告しておこう……。私の書いたこの本をさらに読み進めるのは、よくよく考えた後にしなさい。あなたの聴覚器官をはじめとする知覚器官*ならびに消化器官は、最近の地球上に出回っている「インテリゲンチヤの文学的言語」に対しても完全に自動化されていくかも知れないため、「この本を読むことは、あなたをとりわけ不快にさかなでするおそれがある。そうしたときに、あなたが何を失うことになるのか、あなたには想像がおつきだらうか……。大好きな」ちそうを前にしての食欲やら、近所の黒髪の女性を目にするたびに格別に「心」をくすぐられるなどといふ自分の精神的特徴や、あなたは未練がおありではないのか。

* 訳注：「知覚器官」organs of perception。物語中で何度も使われねじ葉。perceptive organというもつと一般的な言い方に比べると、perception（感覚）の意味が強調されている。

そのようなことが、私の言葉遣いによつてといつよりも、正確には、私独自の思考様式によつて引き起しられるかもしれない」とを、これまでに何度もくりかえされた前例のおかげで、私はすでに、「純血のろば」が自分のがんこその妥当性と正当性を確信していると同じぐらい、わが存在の全体をもつて確信している。

「うしてあなたにもつとも重要な警告を与えた以上、これから何が起こるうとも、私の心は安らかだ。たとえ私の書いたものから何かの間違いが生じることがあつたにしても、それは全面的に読者の責任であり、わが良心は、たとえば……故ウイルヘルム皇帝のそれのように曇りなきままである。

もつもありそなこととして、今あなたは、私のことを、外見には恵まれているが、「中身は疑わしい」若者のひとりとして思い浮かべており、さらには、新米の作家である私が、有名に、そして金持ちになろうとの思惑から、明らかにわざと、奇妙な風を装っていると思いつているに違いない。

もし、ほんとうにそのようにお考へなら、あなたはひどく間違っている。まず、私は若くない。私はすでに、いわば「人生の礪臼のみか、ありとあらゆる砥石まで通過する」ほどの年月を生きている。次に、私はおおむねのところ、経験を作るため、つまりいわば「足をしつかりと地につける」ためにこの職業を利用しているのではない。ちなみに私が思うには、この職業に従事する者たちには「地獄」直行の候補者となるための豊富な機会が用意されている。もつともこれは、彼らが何の知識もなしにありとあらゆる「場当たり」的なものを書きちらかすことで自動的に権威を獲得し、そして彼ら自身がそれでなくとも矮小化している人々の精神を——その総合的な効果によつて——さらに矮小化させる大きな要因のひとつとなるぐらいいに、みずからをみずからの《存在》において完成させることができたらの話ではあるが。

また、私の個人的経験について言つならば、あらゆる高次の、そして低次の、さらにお望みならば、右から、そして左からの方に助けられ、私はそれをどうの昔に確立しており、しかもそれは長年にわたつて「しつかりとした足」に支えられてきている。さらに言えば、それはたいへん頑丈な足で、過去、現在、未来における私の敵どもの数にも関わらず、その力があと何年にもわたつて十分に持続するだろう」とを、私はとりわけ確信してさえる。そうだ。ちょうどいま、私のむこうみずな頭に浮かんだ一計についてもここで話しておくことにしよう。私のはじめての著作であるこの本をまかせる予定の印刷屋に特別に依頼して、この第一章は、本のページを切ることなしに、だれもが目を通すことができるような製本をさせるのだ。そうすれば、

この第一巻を読んで、それが普通のやりかたで書かれたものではないことを、つまり刺激的なイメージや「こちよい空想を読者の精神にとてもなめらかしかも簡単にもたらすために書かれたものではないことを知つた段階で、そう望むだれもが、いちいち本屋と喧嘩しないでも本を返し、おそらくはみずからが額に汗して稼いだものであろう」とができる。

この計画は忘れずに実行することにしよう。たつたいま、あるトランスクーカサス系クルド人にまつわる話をふたたび思い出したからである。この話を聞いたのは私がまだとても若かったころのことなのだが、それ以来、似たような場面でくわすごとにこの話が思い出され、そのたびに、長く続く、打ち消しがたい同情心がこみあげてくるのを禁じえなかつたものだ。あなたにもこの話をしておくことは、私にとっても、あなたにとっても好都合だろう。

これが好都合である」との最大の理由は、「この話の「みそ」、あるいは最近の生糸のユダヤ人ビジネスマンが「チムツシユ」と呼ぶものを、私は自分がこの新しい職業を通じて特定の目的を達成するために用いる新たな文学形態の基本原則のひとつにすることに決めたからだ。

ある日、このトランスクーカサス系クルド人は、何かの用事で村を離れ、町へとやってきた。そして彼は、町の果物屋の店先に美しく陳列されたたくさんの果物を目にした。

彼の目は、店先に並んだある「果物」に釘付けになつた。色、形とともに美しいその「果物」の外見に夢中になつた彼は、味見したいという誘惑に耐えられず、懐中ほとんど持ちあわせがなかつたにも関わらず、この機会を逃すことなく、たとえひとつだけでも、われらが《偉大なる母》すなわち《自然》のこの贈物を買い、味見してみようと決心した。

そして彼は、激しい熱意と、いつも彼らしくない勇気をもつて店に入る。と、彼を夢中にしたその「果物」を二つ二つの指で指し、店員に値段を聞いた。店員が答えるには、その「果物」は一ポンドあたり二セントだという。自分の目にはこのうえなく美しいものとして映つたその果物がまったく高いものではなかつたことを知り、われらがクルド人はまるまる一ポンド買う

ことにした。

町で用事を済ませた後、彼はその日のうちに、今度は家に向かってふたたび歩き始めた。

日の暮れるころ、丘や谷間を歩きながら、われらが『共通の母』すなわち『偉大なる自然』のふところに抱かれ、その魅惑的部分の外面向的な美しさをいやおうなしに感受し、産業化された町ではおなじみのものとなつた排出物によつて汚されていない純粋な空気をわれしらず吸収するうちに、突然このクルド人は、まことにもつともながら、ありふれた意味での食物も楽しみたいという欲望を感じた。そこで彼は、道端に腰を降ろし、食糧袋から、パンといつしょに、その外見が彼を夢中にした例の果物を取り出すと、さも楽しげに食べだした。

「ところが……。なんという恐怖！……まもなく、体じゅうが燃えだした。それでもなお、彼は食べるのをやめなかつた。

この不幸な二本足の生き物が食べるのをやめなかつたのは、人々が遺伝的に受け継いでいる例の特殊な性向のためである。そして私は、人間のこの特殊な性向に関する法則を私の新たな文学形態の礎とすることに決めたのであり、そしてそう決めて以来、この法則は私の眼中にある目的のひとつへと私を導く「灯台」のようなものになつてゐる。確信をもつて言うに、私がここで言ったことの意味については、あなたも——もちろんあなたの理解力に応じて、そしてあなたが危険を承知のうえでこの本を読み進めるならばだが——これに続くいくつかの章を読むうちに、たちまち把握されることだろう。あるいは、この第一章を読み終えるまでにさえ、早くもあなたは、何かを「嗅ぎつける」かもしれない。

われらがクルド人が、『自然』のふところで食べた奇妙なごちそうによって体内に生じたなじみない感覚に圧倒されていると、村仲間のひとりがちょうどその道を通りかかった。通りかかった村仲間は、頭のよさと豊富な人生体験によつて知られる男だったが、彼はこのクルド人の顔が火のようにほてり、目からは涙を川のように流しつつ、それでもなお、まるでそれが自分にとつて最大の義務でもあるかのように、一心不乱に、まぎれもない「赤とうがら

し」を食べているのを見て、次のように言った。

「何をしているんだ、このシェリコのろばめ。おまえは生きながらに焼かれてしまうぞ。おまえの本性にまったくそぐわぬ、そのとほうもない被造物を食べるのをやめるのだ！」

「いや、どんなことがあつてもやめるものか。おらのなけなしの二セントで買ったんだからな。たとえ魂と肉体とが離ればなれになろうともやめるものか」

そして、明らかに意志堅固な男だったに違ひない、このわれらがクルド人は、「赤とうがらし」を食べるのをやめなかつたのだ。

私が期待するとおりなら、この話を耳にしたことで、あなたの精神には、この話に結び付いた心理的連想……あなたがたがおおまかに理解と呼ぶものをして私は現代人にももたらすような連想が、早くも生まれつつあるだろう。そして私が願つているのは、人間のこの性向——金を払つて手に入れたものはなんであれ、最後まで使いきらずにはいられないという形で、いやおうなしに行動にあらわれるこの性向——を知りつくし、それを再三にわたつて憐れんできた私自身の全体が、あるひとつの思いによつて活性化されたのはなぜかをあなたが理解することである。あるひとつの思いとは、ほかでもない、いわば「食欲と精神におけるわが兄弟」であるあなたが、これまでにもあらゆるたゞいの読書に親しんでこられたとはいえ、その経験は先に述べたような「インテリゲンチヤの言語」の範囲に留まるものでしかなかつた場合、この本が便利で読みやすい普通の言葉で書かれてはいないことをあなたが知つたのは本の支払いを済ませてしまつた後だつたばかりに、あなたもまた、人間が持つこののような性向のために、哀れなトランスクーラス系クルド人がその外見に惑わされて、「冗談どころの話ではない」、あの堂々たる赤とうがらしを食べ続けなければならなくなつたと同じように、この本をどんな犠牲を払つてでも読み通さなければならないようなはめに陥らないよう、できるだけのことをしておかなければならぬといふ思いである。

人間のこののような性向——現代人の全体には、明らかに、たびたびの映画

館通いと、異性の左目をのぞきこむ機会をひとつたりとて逃さないという癖によって、このような性向の下地となる素材が形成されているのだが——によって何の間違いも起こらないよう、私は前述したような特別な製本をさせ、この章は本のページを切らないでも自由に読むことができるようにしておこう。

さもないと、返本した際に本屋はいわゆる「なんくせ」をつけ、「餌に食らいついた魚を逃がすのは間抜けの証拠」という言葉で要約される本屋の基本方針に基づいた行動をとり、すでにページの切られた本を受け取るのを渋るだろう。まったくの話、私は本屋がこのような非良心的な態度にされることを十分に予想するのだ。

本屋のこのような非良心的な態度を私に確信させるに至つたもうもの素材が私のなかに完全に形成されたのは、私がかつてプロの「インド式苦行者」だったころのことだ。そのころの私は「超哲学的」問題の解明に役立てるため、他のさまざまな事柄に加え、現代の本屋とその店員が買い手に本をつかませる際に、彼らの自動的精神がどのような連想のプロセスを経て発動されるのかについても熟知しなければならなかつた。

「」のようにすべてを知りつくし、また、さきごろ私を襲つた不幸な事故以来、習慣的に、そして極端にまで義理堅く、気むずかしくなつた私には、くりかえして言わざにはいられない、というよりも、ふたたび警告せずには、あるいは懇願せずにはいられないのだが、どうか第一巻のページを切る前に、この第一章の全体を、とても注意ぶかく、しかもくりかえして読みなおしてさえいただきたい。

しかし、この忠告にも関わらず、あなたがこの本のもつと先のほうもお読みになりたいのなら、私にできる唯一のことは、あなたがこのうえなく旺盛な食欲をもつて——あなたばかりではなく、あなたの身の回りの方々の健康のためにも——あなたが、お読みになつたものを「こと」として消化されるよう、わが「本物の魂」をもつてお祈りすることだけである。

わが「本物の魂」と言ったのは、最近ヨーロッパに暮らすようになつてから、人間の内的生命を指すとき以外には使われるべきではない神聖な言葉を、

あらゆる適当な、そして不適当な機会にのぞんで空しく口にする輩にしばしばでくわすために、すでに宣言したとおり、現代人とは違つて理論的なものばかりではなく、実践的なものも含めた、幾世紀にもわたる民衆の知恵を体現するもろもろの格言の信奉者ではある私は、この場合では「ローマにあってはローマ人に従え」という格言にのつとり、会話のなかで神聖な言葉を空しく口にするという、ここヨーロッパでの習慣にあえて逆らわず、それでもなお、聖モーゼの神聖なる唇より発せられた「神聖なる御名を空しく口にするべからず」という戒律にそむかないようにするため、現代における「ほやほや」の流行言語である英語を利用することに決め、それ以来、もし必要とあらば、わが「英語の魂」をもつて誓うことにしているからである。

この流行の言語によると、この「魂」という言葉は、足の裏を意味するソウルという言葉とほとんど同様に発音され、つづられさえもすると、うのが、この話のポイントである。

私の本をすでに半分買いかかっているあなたが「これについてどうお考えになるかは知らないが、私の独特の本性は、われらが共通の父・創造主によって格別に愛された、人間のなかでもっとも高次の部分が、現代文明に属する人々によって、それが実際に何であるかをほとんど理解されないまま、人間のもつとも下にあるもつとも汚い部分と同一視されていることの表明であるこの件に関して、精神によるいかなる抑制をもつても打ち消しがたい激しい怒りを感じずにはいられない。

さて、「哲学者きどり」はもうやめにしよう。そして、他のさまざまな目的に加えて、一方では読者の眠たげな思考を振りさまし、他方では読者にあることを警告するように運命づけられたこの最初の章での本来の仕事に戻ることにしよう。

私はすでに、これから叙述の計画なり順序なりを頭のなかでまとめてあるとはい、正直なところ、私の意識はまだ、それが紙の上でどんな形になるのかを捉えられずにいる。しかし、早くも私の下意識は、それが全体としていわば「辛い」ものとなり、あのトランプスコーカサス系クルド人に赤とうがらしが及ぼしたと同じ影響をあらゆる読者の全体に及ぼすであろう」とを

はつきりと予感している。

われわれありふれた人間の代表であるこのトランスコーカサス系クルド人の物語に親しんでもらつたところで、私がこれから執筆を予定しているあらゆる本の前書きのようなものであるこの章をさらに書き進める前に、あなたに早くもこれを打ち明け、あなたの「純粹な醒めた意識」にお知らせしておくれのが私の義務ではないかと思うのだが、私は、警告のために書かれたこの

章に続く部分で私の思考を展開するにあたり、独特な順序といわゆる「論理的対峙*」を用いることにより、真実を告げるもろもろの概念の本質が、いわゆる「醒めた意識」（多くの人々は無知ゆえに、これを本物の意識と取り違えるのだが、私の考え、ならびに私の実験が証明するところによれば、これは虚構の意識にすぎない）から、ふつう下意識と呼ばれるものへと、いわば自動的に引き渡されるようにするつもりである。私に言わせるなら、この下意識こそが人間の本物の意識である。そして、もろもろの概念の本質がこの下意識に伝達されたなら、それらは、本来ならば個人の全体のなかで日常的に進行するべきである変容のプロセスを自動的に成就させ、本来ならば各人が意識的に精神を用いることで獲得するべき結果、すなわち一つまたは二つの脳しか持たない生き物**とは違った存在としての人間にふさわしく、そのような存在としての人間が手に入れてしかるべき結果をもたらすのである。

* 訳注：「論理的対峙」logical confrontation は「対決による結合」confrontative association むふむやい、「三の法則」（トリアマジカムノ）に従つた特定の形式で材料と材料をぶつけあわせ、そこから理解を引き出すプロセスに関連した表現。詳細は四十六章で説明される。「論理的」の「論理」とは「三の法則」のロジックを指すと思われる。

私は必ずこのような書き方をしよう。そして、すでに述べたように読者の意識を目覚めさせるために書かれたこの章が完全にその使命を果たし、私に言わせれば虚構のものにすぎないあなたの表層の「意識」だけではなく、本物の意識にまで達するよう仕向けよう。言うなれば、あなたのいわゆる下意識が、生まれてはじめて、能動的に考えることをあなたに強いるようにさせるのである。

遺伝や教育の如何を問わず、どんな個人の全体のなかにも、機能においても作用においても互いに共通のものを何も持たない二つの独立した意識が存在する。そのひとつは、偶然に生じた、あるいは他者が意図的に提供した多種多様な印象を機械的に吸収することで形成された意識であり、これらの印象のなかには、じつのところ何の中身もないさまざまな言葉の「音色」も含まれている。もうひとつは、遺伝によって受け継がれ、すでに各人の全体のなかの相応の部分と混ざり合い、いわばすでに「確固たるもの」となったもうものの結果、ならびにそれらの結果と「新しい体験から生じた結果と」の対決による結合の成果から形成された意識である。

いわゆる「下意識」とは、ほかでもない、人間のこの第二の意識の内容物と、この第一の意識の働きそのものの両方を指している。この第二の意識は、遺伝によって受け継がれ、人のなかで物質化したもろもろの材料、ならびに各人がそれらの材料と意図的に向かい合うことで生み出したものから構成される。そして、例外的な好条件のなかで長年にわたつて進められた実験的研究のおかげで私が到達した確信によれば、人間の心身全般を支配しているのはまさにこの下意識である。

私のこのような確信も、あなたにはまだ、病める精神の産物としか思われないのであろうが、それでもあなたもお察しのとおり、私はいま、この確信ゆえに、この第二の意識を無視できない。よって私は、わが本質の命じるところに従つて、自分が執筆を予定しているあらゆる本、ならびにそのすべての前書きであるこの章を書き進めるうえで、私の書くものが読者のこの一種類の意識の雑多な中身に接触し、私の目的にかなつたやりかたでそれらを「搖さざる」ように計算しなければならない。

* * 訳注：「一つまたは二つの脳をしか持たない生き物」は虫や動物を指す。

」のように計算しながら書き進めるにあたって、何よりも先に、あなたの「虚構の意識」に対して言つておかなければならないのだが、私の準備的年代のいくつかの時点で私自身の全体のなかに結晶化された三つの奇妙な素材のせいで、私は、たまたま私に出会った人たちの内側に彼らが彼ら自身の深い認識や信念だと思っている事柄に関する「混乱と疑い」を引き起こすという、じつに独特的の才能を身に付けるに至っている。

ははあ……。すでに私には、あなたの「虚構の意識」——もつともあなたにとつては「本物の意識」——のなかで、あなたが叔父さんや母親から受け継いだおもだつた素材のすべてが、まるで「盲目の蝶」のように混乱しだしたのを感じることができる。それらの素材はすべて、どんな場合にも少なくとも、あらゆるものに対する好奇心をかきたてる性質のものであり、たとえば今の場合では、あなたは、いわば新米の作家であつて、新聞に名前の出たことなど一度もない私のような者が、どうしてこのような独自の才能を身に付けることになったのかをできるだけ早くお知りになりたいのである。

心配御無用。それがたとえ「虚構」の意識においてのみのことだろうと、あなたに「このような好奇心が生まれたことを、私は個人的にたいへん好ましく思う。人間として恥じるべき」のような好奇心も、ときによつては、「虚構の意識」から人間の本性へと引き渡され、そこで価値ある衝動に、つまり知識への衝動になることさえもあるからだ。しかも、何かの拍子に現代人がみずからの注意を何かの対象に集中させることがあつたならば、そのときにこの種の衝動は、当人がその対象の本質をより明確に認識し、より詳細に理解することを助ける。よつて、すでに経験からこのことを知つている私は、この時点であなたに生まれた好奇心を喜んで満たしてあげようと思うのだ。

さあ、では耳を傾けて私の期待に答え、私をがっかりさせないように努力していただきたい。《客観的正義》が運行される《天の裁きの庭》の二つの聖歌隊の一部のれつきとした人々、そしてこの地球でも、まだきわめて少数とはいえ一部の方々が「喰きつける」こととなつた、わが独特の個性は、すでにお話ししたとおり、準備的年代において私のなかに後天的に形成された三つの特殊な素材の上に築かれている。そのうち最初に形成された素材は、そ

もそのはじめから、私のすべてを突き動かす心棒のようなものとなり、その後に形成された二つの素材は、最初の素材を成長させ、完成に導くための「活力の源」とでも呼ぶべきものとなつた。

第一の素材が形成されたのは、私がまだ「小さなふとつちよ」にすぎなかつたころのことである。そのころ、今は亡きわが愛する祖母はまだ生きており、百いくつかの年齢だった。

私の祖母——わが祖母が天の王国を勝ち取らんことを——が死の床についたとき、私の母は、当時の慣習に従つて、私を祖母の寝台のかたわらに連れていった。私が右手に接吻すると、今は亡きわが愛する祖母は、その死につつある左手を私の頭の上に置き、ささやき声で、しかしとてもはつきりと、次のように言つた。

「私の最年長の孫であるおまえに言つ。私のきびしい遺言の言葉をよくお聞き。人生において、他人がするようなことをけつしてしてはいけないよ」

「こう言うと、祖母は私の鼻柱をみつめ、私が明らかに混乱し、言われたことをぼんやりとしか理解していないことを見て取ると、多少怒つたように、命令するような口調で次のように言つた。

「何もせずにただ学校に行きなさい。さもなければ、だれもしないことをしなさい」

こう言い終えると、祖母は一瞬のためらいもなく、身の回りのすべてのものに対するあからさまな蔑みの衝動と堂々たる自意識をもつて、《かの真実なる》大天使ガブリエルの手に、その魂をゆだねた。

これをお話するのがあなたの関心にかない、さらに教訓的でさえもあるので、突然私は身の回りのどんな人間の存在にも耐えられなくなり、私の生まれた原因のそのまた原因の死すべき「惑星的身体」が横たわる部屋を抜け出ると、そつとだれにも気づかれないようにしながら、われらが「衛生家」たち、つまり豚たちに食べさせる糠とじやがいものの皮が四旬節のあいだ貯められている納屋に隠れると、食物も飲物もなしに、渦巻き、混沌とした想念の嵐（もつとも、私にとつてさいわいなことに、当時の私の子供じみた頭の

なかには、まだほんの限られた数の想念しかなかったのだが）に囲まれたまま横たわった。しかしやがて、墓地から帰ってきた母が私のいらないのに気がつき、あたりを空しく捜しまわったあげくにすすり泣く声が私をいわば「いたたまれなく」すると、私はたちまち納屋から駆けだし、まず立ち止ると、どうしたわけか、両手を広げたままもじもじし、それから母に走り寄つてスカートにしつかり抱きつくと、足を踏み鳴らし、なぜであろう、となりの地主が飼つているろばのいななきを、われ知らずまねていた。

なぜこの一件がこれほど力強い印象を当時の私に与えたのか、そしてなぜ私がほとんど自動的にここで述べたような奇妙なふるまいをしたのか、私は今でもわからずいる。ただ、近年になってから、それもとりわけ一年のなかで「懺悔節」と呼ばれる時期に、私は、主としてその理由を見いだすために長々と考えるようになった。

これについて考え、私がたどり着いた唯一の論理的説明は、この神聖なる一幕が演じられ、その後の私の人生の全体にとつてとてつなぐ大きな意味を帯びることとなつたその部屋の大気が、キリスト教のどんな側面の信奉者にとっても親しみの深い「アトスの僧院」から持ち帰られた特殊な香のにおいて満たされていたことを、その単純な理由と見なすものだった。これが本当の理由かどうかはわからないが、以上はあからさまな事実である。

この一件からしばらくの間は、私の全般的な状態に何も変わつたことは起きなかつた。もっとも、私がその間にいつも多めに足を宙に向けて歩いた、つまり逆立ちして歩いたという事実をこの一件と結び付けて考えることは可能かもしれない。

私がはじめて周囲の人々のふるまいとは明らかに調和しないことをしたのは、祖母が死んでちょうど十四日目のことだった。もっとも、その行為は、私の意識ばかりか、下意識さえもまったく関与することなしに為されたのである。その日、私の家族と親類縁者の全員と、生前だれからも愛されていた私の祖母を尊敬していたあらゆる人々は、慣習にのつとり、墓地に眠る祖母の死すべき身体のかたわら、「鎮魂式」と呼ばれるものをとりおこなうために集まつていた。そのときのことである。私は突然、世間的な地位を問わず

何らかの道徳規則——具体的な規則だろうと精神的な規則だろうと——を多少なりとも身に付けている人間が例外なしに習慣としていることに反し……つまり圧倒されたかのように立ちつくし、顔には苦渋を装い、さらにできることなら涙さえ浮かべるかわりに、何の脈絡も理由もなく、墓のまわりを踊るようにスキップし、次のように歌いだしたのである。

わが祖母を聖者とともに休ませよ。
今、その爪先は天指したれば。

おい！ おい！ おい！
わが祖母を聖者とともに休ませよ。

今、その爪先は天指したれば。
等々……

そして、これをきっかけにして、私の全體には、どんな「さるまね」——身の回りの人々が自動的にやつてている日常的な行為の模倣——をするにあつても、常にそして全面的に、それを他人とは違つたやりかたでしようとする「抵抗しがたい欲求」を生み出す「何ものか」が生まれた。

そのころの私がしたことには、次のようなものがある。

たとえば、私の弟や妹たち、それに近所から遊びにきた子供たちがボールを高く放り投げて右手で受け止める練習をしていたとする。私は同じ目的のために、まずボールを強く地面に投げつけて跳ね返らせ、そして自分はどんなボーラーを打つた後に、左手の親指と中指だけでそれを捕らえるのだった。また、他の子供たちが頭を下にして丘の斜面を滑り降りれば、私は、そのころ子供たちが「尻から先に」と呼んでいたやりかたで滑り降り、しかも、くりかえすたびにもつと上手に滑つたものだ。あるいはまた、私が他の子供たちといつしょにいろいろな「アバランチ子*」をもらつたとすると、他の子供たちは、明らかに、味覚の喜びを長引かせようとして、まず全体をなめまわしてから口に入れるのだったが、私の場合には、まず、くまなく匂いをかいだ後、たぶん耳にまでて熱心に聴覚を傾け、そしてほとんど無意識に

ながら、それでも真剣に、「これ、あれ、その仕事して、死にそうになるまで食べてはならぬ」と、自分に向かってつぶやき、調子をあわせてハミングしながら一口かじり、味見もせずに飲みこんでしまうといったふうだった。

*訳注：「アバラン菓子」＝アルメニアのアバラン地方の菓子

今は亡き私の祖母の遺言にさちらなる力を与え、それを完成へと導く「活力の源」となった、先に触れた二つの素材のうち、第一のものが私に生まれるきっかけとなつた出来事が起つたのは、私が小さなふとつちょから「若いがきども」のひとりへと成長し、早くもよくいわれるような「すばらしい外見と疑わしい中身の若者」の候補になりかかっていたころである。

その出来事は、『運命』ご自身の手によって特別に準備されたものとも思われる、次のような状況のもとに起つた。

ある日のことである。私は自分と似たような何人もの少年たちといつしょになつて、近くの家の屋上に鳩の巣を仕掛けていた。すると突然、それまで私に覆いかぶさるようにして私のすることを熱心に観察していた少年が言った。

「ぼくの思うには、馬の毛で作った輪に鳩の親指が絶対に引っかかるしないように工夫しなければだめなんだ。動物学の先生がこのまえ教えてくれたようだ。鳩の活動中にその余力が貯えられているのがこの親指だからさ。だからもし、この親指が輪にかかつたりしたら、もちろん巣などは簡単に壊されてしまうだろうよ」

ところで、ちようど私に向かい合う格好で身を乗り出していた別の少年の口からは、しゃべるたびに大量の唾が四方に飛び散るのだったが、彼は、最初の少年が言つたことに反論し、このときも大量の唾とともに、次のような言葉を吐き出した。

「黙りやがれ、このホツテントットとのあいの『野郎め！』その先生やらと同様、おまえはなんというできそこないなんだ。かりに鳩の最大の身体的力が親指に貯えられているというのがほんとうだったとしても、それだった

らなおさらのこと、その親指が輪にからまるようにするべきじゃないか。それでこそはじめて、われわれの目的において、つまりあわれな鳩どもを捕まえるうえで、例の柔らかくて捉えどころのない『何ものか』のあらゆる所有者にふさわしい頭脳の特質に何らかの意味が生じてくるというものだ。つまり、法則に従つて必ず周期的に起つる『心身の変化』が、この目立たない変化に影響する外部の要因の作用によつて引き起こされると、心身の活動全般に含まれる他の活動を活性化するために起つるこのちょっとした『周期的混乱』は、例の捉えどころのない『何ものか』がそのなかでごく小さな役割を果たすにすぎない心身の活動全般の重心がいつもとは違つた箇所に一時的に移ることを即座に可能にするのであり、しばしばその結果、心身の活動全般にばかりたままでに奇妙で意外なことが起つるのだ』*

*訳注：「意識の持ち主なら考えてみるべし。（たとえば人間でも）外部的要因（月）の影響を受けて意識の関与なしに周期的に心身に起きた外見的には目立たない現象によつて心身全体の重心の位置が変わり、ふつうでは考えられないようなばかげたことを起こすじやないか」。やや危険な意味を含んだ婉曲なジョークによつて、後から物語のなかで扱われるいくつかのテーマを暗示している。英語でこれを読む読者の場合、periodという言葉に隠された意味から、物語の主要なテーマである「月の影響」ならびに「順類の周期的破壊」（戦争）の話へと連想が働く。

この最後の言葉を少年は大量の唾といつしょに発音したため、私の顔は、ドイツ人がアニリン染料用に発明した「噴霧器」、それも「模造品」ではないやつの一斉攻撃にさらされているかのようだった。

それは我慢の限界を超えていた。そこで私はしゃがんだ姿勢のまま少年に向かって突進し、みぞおちに力いっぱい頭突きをおみまいすると、彼を一瞬にして「意識不明」にした。

人生のさまざまの局面で観察される驚くべき偶然の一一致と私が見なすもの

についてこれからお話しすることがあなたの精神にどのような結果をもたらすことになるのかを私は知らず、知りたいとも思わないのだが、私自身の精神にとって、「ここに見られる偶然の一一致は、私の青年時代に起こったこの一件がただ偶然に起こつたものではなく、何らかの外的な諸力によつて意図的に創造されたものだつた可能性を如実に示す格好の材料である。

「……」偶然の一一致というのは、この必殺技をトルコから来たギリシャ人の僧侶から私が徹底的に仕込まれたのはそのわずか二、三日前だったということである。そのギリシャ人は、その政治的信念ゆえにトルコ人から迫害を受け、やむをえずトルコを逃れて私の町にたどりついたところを、両親が私の現代ギリシャ語の教師として雇つたのだった。

彼がどのようなものを彼の政治的信念や思想の土台としていたのかを私は知らないが、このギリシャ人僧侶とのどのような会話のはしばしにも……たとえば古典ギリシャ語と現代ギリシャ語との間での感嘆詞の違いについて私は説明しながらも、彼が一刻も早くクレタ島におもむき、そこで眞の愛国者にふさわしく行動することを夢見ているのがじつにあからさまにうかがわれたことを私はとてもよく覚えている。

ところで私は自分の必殺技の威力を目のあたりにして、正直なところ、恐

れおののいた。そのような部位への打撃によって引き起こされる身体の反応についてまったく知らなかつた私は、てつきり彼を殺してしまつたものと思ひ込んだからだ。

私がそのような恐怖におびえていると、私のいわゆる「護身術」の最初の犠牲者となつた少年のいとこにあたる少年が、この一件を見てゐるや、一瞬もためらうことなく、そして明らかに「血のつながり」と呼ばれる感情に圧倒されて、すぐさま私に飛びかかると、拳で顔面をしたたか殴りつけた。

しばらくして、この二つの奇妙な感覚が私のなかで収まるど、私は實際、口のなかに変なものがあることに気づいた。指で取り出すと、それは奇妙な形をした大きな歯にほかならなかつた。

私がこのとてつもない歯に見とれていると、他の少年たちもみんなで私を取り囲み、同じく大きな好奇心と奇妙な沈黙をもってこの歯を見つめだした。大の字になっていた例の少年も「のときまでに回復し、立ち上がりと、まるで何も起こらなかつたかのように、いつしょになつて歯を見つめていた。この不思議な歯には七本の根が生えていて、それぞれの先端には血のしづくが残されていた。そして、それぞれの血のしづくをとおして、白光を作れる七つの色がひとつずつ、まぶしくはつきりと輝いていた。

「若いがきども」にとつては珍しいものだつたいつの沈黙が破られた後、ふたたびいつもの大騒ぎが始まった。そしてこの大騒ぎのなかで私たちが決めたのは、抜歯の専門家だった床屋のところへ直行し、どうしてこの歯がこんな奇妙な形をしているのかを聞いてみようということだった。

そこで私は、床屋へと向かった。「今日の英雄」である私を先頭にしてである。

床屋は歯を一見して、「これはたんなる「知恵歯」、すなわち「親知らず」にすぎないと言った。はじめて「パパ」、「ママ」と言えるようになるまで、ずっと実母の乳だけで育てられ、かつ、初見においておおぜいのなかから自分の父親の顔を見分けることのできた男の子はみな、このような歯を生やすのだという。

この出来事のおかげで私の「知恵歯」は哀れにも完全に犠牲になってしまったのだが、この出来事が私に及ぼしたあらゆる影響の総合的な作用のため、

それ以来、私の意識は、今は亡き私の祖母——神よ、その魂を祝福したまえ——が私に遺したいましめの言葉の本質中の本質を、「あらゆる」ととの関連において着実に吸収していった。しかも、私の家は現代文明の中心地のいぢれからもはるかに隔たつたところにあつたので、当然、「正規の歯医者」に歯の抜けた穴を診てもらうことはできなかつたため、この一件以来、その穴からは慢性的に「あるもの」が「じみだす」ようになり、そしてさらに、パリのモンマルトルのナイトクラブでしばしば顔を合わせるうちに私のいわゆる「親友」となつたある高名な気象学者が最近私に説明してくれたことによれば、この「あるもの」には、あらゆるたぐいの不可解な「事実」への興味と、

そのような「事実」の根本原因を明らかにしようとする傾向を生み出す特性があるため、遺伝によって私自身の全体に伝えられたものではないこの特性は、ひとりでにだんだんと私を導き、私ついには、私がしばしば目にすることになったりとあらゆる怪しい現象の解明における専門家とまでしたのである。

この出来事をきっかけに私のなかに新たに形成されたこの特性は、私がその後——もちろん「万物の支配者・非情なるイエローパス」すなわち「時間の経過」のおかげで——先に描写したような若者に変身してからは、「私にとつて、常に意識の炎に燃える、消える」とのない、正真正銘の炉のようなものとなつた。

さて、先に触れた「活力の源」のうち第二のものは、この地球に生きるわれわれの間で起こつたある出来事について偶然に耳にしたことが私に与えたさまざまな印象の総合的な影響であり、それはわが愛する祖母の遺言と私自身を構成するあらゆる素材との間に完全な結合をもたらした。アラン・カルデック氏が「極秘」の降霊会で明らかにしたことによれば、私が耳にしたこの出来事は、わからが『広大なる宇宙』の地球を除く全惑星に生まれて暮らすわれわれに似たあらゆる生き物が大切にする「生の原則」のひとつとしての有名になつた原則が生まれるきっかけを作つた。

この新たなる「全宇宙的な生の原則」は、次のような言葉になつてゐる。

「どうせぱつとやるなら郵便代もこみで」

今ではすでに宇宙的なものとなつたこの原則が生まれたのは、そこであなたが生まれたのみならず、薔薇の花園に安穏と暮らし、しばしばフォックストロットなどおやりになる惑星なのだから、私には、この宇宙的な原則の起源に関する詳細の一部を明らかにする手持ちの情報をあなたから隠したままでおく権利はないであろう。

前述したような新しい傾向、つまりあらゆる「事実」の本当の原因を明らかにしたいという不可解な情熱が完全に私の本性の一部となってからまもなく、私はロシアの中心、モスクワの町をはじめて訪れたのだが、私はこの町で私の精神的欲求を満たすものをほかに何も見つけることができず、ただ口

シアに伝わる民話やことわざの調査だけに精をだしていた。そのころのことである。偶然によってか、あるいは私の知らない何らかの法則から客観的に導かれた結果としてか、私はたまたま、次のような出来事について知ることとなつた。

昔あるとき、周囲の人々の目には一見、ただの商人にしか見えなかつたあるロシア人が、何かの用事で故郷のいなか町を離れ、ロシアの第二の首都、モスクワに行かなければならなくなつた。そしてそのとき、彼のいちばんお気に入りの息子（それはその子が母親だけに似ていたからだが）は、ある本を買ってきてくれるよう、彼にお願いした。

意識せずして「全宇宙的な生の原則」の偉大な作者となつたこの商人は、モスクワに着くと、昔も今も変わることのない当地での習慣にもれず、友人のひとりといつしょに、本場の「ロシアン・ウォツカ」で「泥酔」した。

呼吸器官を備えた二本足の生き物の、現代における最大の集団の成員であるこのふたりが、この「ロシアの精華」の相当数のグラスを空け、そして、会話を始めるうえでの昔からの習慣に従い、まず最初の話題として、いわゆる「公共教育」について議論するうちに、突然わからが商人はこの話題からの連想で、愛する息子からのお願いを思い出し、そこでさつそく、友人とふたりで本屋に行くことにした。

商人は、捜していた本のことを本屋で尋ね、そして店員から渡された本に目を通すと、その値段を聞いた。

店員によれば、その本は六十コペイカとのことである。

表紙に印刷された値段がたつたの四十五コペイカであることに気がついた商人は、まず、ありふれたロシア人には珍しく、奇妙なふうに考え方だした。そして両肩をちょっとといからせ、柱のように直立し、番兵のように胸を突き出すと、少し間をおいてから、とても静かに、ただしとても偉そうに言った。

「ここに四十五コペイカと書かれているではないか。どうしておまえさんは六十コペイカも取るのかね」

すると店員は、セールスマントークのいわゆる「お世辞っぽい」顔をして、

本 자체はおっしゃるとおり四十五コペイカなのでございますが、六十コペイカでお売りしなければならないのは、郵便代の十五コペイカが加算されているからでございます、と言つた。

店員のこのような説明を聞いた後に、この二つの互いにまったく相容れない、しかしいかにも簡単に相容れるものともなりそうな事実によって混乱したわれらがロシア商人の内側で何かがはじまりを告げたことは、目にも明らかだつた。彼は天井を見上げ、今度はまるで、ヒマシ油カプセルを発明したイギリスの教授のように考え始めた。そして突然、彼は友人のほうに向きなおると、あの名言を……つまりその本質においてまぎれもない客観的真理を凝縮させ、のちに格言としての性格を帯びる」ととなつた例の名言を地球ではじめて口にしたのである。

彼がそのとき友人に向かつて吐いた言葉は次のとおりである。

「まあいい。気にするんじゃないよ。本は買おう。どっちにしたところで、今日はぱっとやるんだからな。『どうせぱっとやるなら郵便代もこみで』さ」「ここで話したすべてのことを私が知るやいなや、不運にも生きながらにして「地獄」のあらゆるメニューを味わうように運命づけられたこの私のなかで、それ以前にもそれ以後にも味わったことのない、とても奇妙な何かが始まつて、それはかなり長く続いた。それはあたかも、複数の源泉から私のなかに日常的に生じるさまざまな想念や感慨のすべての間で、ヒヴァ地方の現代の住民らがよくやるような「競馬大会」が始まつたかのようだつた。

それと同時に、私の脊椎の全域を、強烈な、ほとんど耐えがたいまでのかゆみが襲い、太陽神經叢のちょうど真ん中にも、やはり耐えがたいまでの激痛が始まつた。しばらくたつと、突然この二通りの相互に引き立てあう感覚は、「空氣からバターを作る方法の発案者たち」を名乗る同胞団への大いなる入門の儀式を受けたときを除けば、のちの人生で二度と味わつたことのない深い平和な状態によつて置き換えられた。そしてこののような状態のなかで、いわゆる「私」——すなわち古代の一変人（昔も今と同じようにそのような変人は「学者」と呼ばれていたのだが）の定義によれば「思考／感情／自動的本能の働きの質に左右される比較的に移ろいやすいもの」、古代アラビアの

有名な学者マーレツレールの定義、つまりのちの歴史の流れのなかでやはり有名なギリシャの学者クセノフォンに引用され、別の文脈のなかでくりかえされた定義によれば、「意識／下意識／本能の複合的所産」として人の内側に生じる「正体不明のもの」——が、眩惑された注意力を内側に向けると、それがとてもはつきり捉えたのは、のちに「全宇宙的な生の原則」となつたこの格言を構成する言葉のひとつひとつが、私のなかで特殊な宇宙物質へと変容を遂げたこと、そしてこの物質は今は亡き私の祖母の遺言によつてすでに長いあいだ私のなかに結晶されていた数々の素材と混ざり合い、それによつてそれらの素材を「何ものか」に変えたこと、そしてこの「何ものか」が私の全体のすべてをとうとうと流れ、私自身の全体を構成するすべての原子のひとつひとつに永遠に宿されたことである。そして次に、わが不運なる「私が痛感し、あきらめの衝動とともに意識した悲しい事実は、これから私は、常に何事においても例外なしに、遺伝の法則に従つてでもなく、環境からの影響に従つてでもなく、偶然がもたらした互いに異質な三つの外的要因によつて私自身の全体のなかに生み出された傾向にのみ従つてふるまわすにはいられなくなつたということである。この三つの要因のうち最初のものは、特に私が望んだわけでもないのに私の出生の原因のそのまた受動的原因となつた人間の遺言であり、第二の要因として私が悪童に歯を叩き出されたのは、そもそもが主として他人の「よだれっぽさ」のせいであり、第三の要因に至つては、私のまったく見ず知らずの「モスクワ産」の商人が酔つて口にした言葉なのである。

この「宇宙的原則」を知る前にも、私はあらゆるふるまいを、私と同じ惑星に生まれて無氣力な生を営む他の一本足の動物たちとは違つたふうにしてきたかもしれない。しかし、それまでの私は、それをもっぱら自動的に、たまたまそうでないときにも半意識的にしてきたにすぎなかつた。ところが、この出来事をきっかけとして、私は意識的に、しかもわれらが『共通の母』すなわち『偉大なる自然』に対する自分の義務を正しく立派に果たしているという自己満足と自己認識が交じり合つた本能的衝動をもつてそれをするようになつた。

たしかに、この出来事が起る前にも、私はすでに、すべてを他人とは違つたふうにしてきたのではあつたが、ここで強調したいこととして、そのころの私のふるまいは、まだ周囲の人々の目に余るほどのものではなかつた。ところがこの生の原則が私の本性に吸収された瞬間から、私のあらゆるふるまいは、何かの目的をもつた意図的なものはいうまでもなく、たんなる「怠惰のままぐれ」によるものでさえもがことごとく活性化され、私のふるまいに直接的または間接的に注意を向けた私と同類の生き物たちはみな、知覚器官に「魚の目」を患つようになつた。それと同時に私もまた、自分のあらゆるふるまいにおいて今は亡き私の祖母が遺したいましめの言葉をその極限にまで展開するようになり、そして私は何か新しいことを始めるときや何かの転機——もちろん大規模なものを指して言うのだが——を迎えたときには欠かすことなく、心のなかで、あるいは口に出して次のように唱える習慣をひとりでに身に付けたのである。

「どうせばつとやるなら郵便代もこみで」

さて、たとえばいま、私はみずから望んでではなく、私の人生に偶然もたらされた奇妙な状況から生じたもろもろの原因のために本を書いているのだが、私はそうするにあつても、人生そのものが作り出した数々の驚くべき巡り合わせを通じてしだいに確固たるものとなり、わが全体を構成する原子のひとつひとつと混ざり合うに至つたこの原則に従わざるをえない。

この精神的および本能的な原則に今回も従えるよう、私はまず、次のようにしよう。大昔から現在に至るまでのあらゆる作家の習慣として、ふつう本の主題として選ばれるのは地球でかつて起つた、あるいは現に起つたつあると仮定された出来事なのだが、私はあえてこの習慣に逆らい、宇宙全体にわたる出来事を著作のなかで扱うことにする。「引き受け」といふときはすべてを引き受ける、「つまり」「どうせばつとやるなら郵便代もこみで」とある。

どんなりふれた作家でも、地球の範囲内のことなら書ける。だが私はありふれた作家ではない。

私が自分自身を、客観的に見るならば「取るに足らない惑星」である地球

に閉じ込めるなどできるだろうか。私には他の作家がふつうに取り上げるような主題に沿つて書くことなど、とてもできない。われらが学者たちもその可能性を指摘しているような現象が突然ほんとうに起きるかもしれないから……というのがその唯一の理由だつたとしてでもある。つまりわが愛する祖母がもしもそれを知つたとしたら、彼女はどうなつてしまふだろう。とりわけ今では他人の立場でものを考えることにすっかり熟練した私が、祖母を理解したうえでいうに、彼女はよく言われるよう一度だけではなく、何度も何度も墓のなかで寝返りを打ち、まるで「アイルランドの風見鶩」のようになつてしまうことだろう。

だが読者よ、心配しないでくれたまえ。私はもちろん地球のことにも触れるつもりだ。ただし、そうするにあつて何のえこひいきもせず、この比較的ちっぽけな惑星とその上で起つたあらゆる出来事が、われらが『広大なる宇宙』のなかで実際に占め、そしてその占めることが——もちろん私の手助けによつてではあるが——あなたのまつとうな論理によつても理解されるであろう位置について、どんな誤解も生じないようにしよう。

また当然ながら、私の本の「登場人物」としても、地球におけるどんな身分の、どんな時代の作家も好んで描き、ほめ讃えるようなタイプ……つまり何かの間違いでこの世に生まれ、いわゆる「責任ある年代」に達するまでの形成期を通じて、神の似姿すなわち人間にふさわしいものをなんら獲得せず、そのかわりに、生まれてから死ぬまでたゆむ」となく、「すべきさ」、「だらしなさ」、「惚れっぽさ」、「意地きたなさ」、「臆病」、「ねたみぶかさ」などといふ、人間として恥じるべき数々の悪癖のみを内側に育んでやまない、ありふれた人間たちを選ぶことはできない。

私が登場人物としたいのは、あらゆる読者が全身全霊をもつてこれは本物であると、いわば「いやおうなし」に感じ取り、さらにどんな読者の内側にもこれはたんなる「だれかさん」ではないと思わずにいられなくなるだけの素材を結晶化させずにはいられないような人物である。

この数週間、私は自分の傷ついた肉体を寝台に横たえながら、これからあらすじを頭にまとめて、それを記述するうえでの形式と順序を考えた。そし

て私の本の第一集の主人公として私が選んだのは——あなたに想像できるだろか——大魔王ベルゼバブ様なのだ。われわれの生活の外側を支配するに至つたありとあらゆる異常な条件のせい、そして特に、われわれの生活に深く根付いた悪名高い「宗教道德」のせいであなたがたの内側に例外なく形成されているはずのもろもろの素材の総合的な作用により、私のこのような選択が、すでに自動的なものとなっている多種多様な否定的衝動を引き起こしかねない連想をあなたがた大多数の精神に最初の最初からもたらすかもしだす、それによってあなたがたの内側には私個人に対する形容しがたい反感を生み出す素材が形成されずにはいないことを知つたうえのことである。

だが待ちたまえ、読者諸君。

もしもあなたがこの「警告」にも関わらず危険を承知で私の本のこれから先の部分にも親しみ、公正不偏の理解に向けての衝動を常に保ちつつその内容を吸収し、私が解きあかすことに決めたさまざまな問題の本質中の本質を理解しようと決心されたのならば、私はいわゆる「気さくさと信頼に基づいた相互関係」が確立されていないことには良いものを良いと認めてすなおに受け入れることさえできないという、人間の精神に固有の特徴を考慮して、ここでもうひとつ、打ち明け話をしておくことにしよう。つまり、よりによって、あなたの心眼にお映りのままの恐るべきベルゼバブ氏をこの本の主人公として選ぶべしと私自身の全体に要求するに至つたもろもろの素材が私の意識の相応の領域に凝縮されたのは私のなかでどのような考えが進行したためであるのかを、包み隠さずお話しするのだ。

主人公のこのような選択には巧妙な下心が隠されていないわけではない。これはつまり、もしも私がこのような形で彼に注目してあげるなら、彼のほうでも疑いなく——私にはもうこれ以上、疑う氣力がないのだが——私の書こうとしている本のなかでいかにしてでも私を助けようとして、感謝の気持ちをあらわしてくれるに違いないという論理的仮説に基づく下心である。

ベルゼバブ氏とわれわれとは、いわば「種ちがい」であるとはいえ、彼もまた考へることができる、さらにもつとも重要なこととして——これは、有名

なカトリックの僧侶、フーラン修道士の論文のおかげで、私が遠い昔に知ったことなのだが——彼は尻尾をカールさせており、私が自分の経験から確信するにはカールが天然に生じるわけではなく、それはさまざまに意識的操作によってのみ得られるものだから、読書によって私の意識に形成された各種のインチキ占いにおける「まつとうな論理」に従つて結論を下すに、ベルゼバブ氏もかなりの見栄つぱりであり、彼の名を宣伝してくれる私のような人物を助けないのは彼自身にとつてきわめて不都合ではないかと思うのである。

われらが高名なる比類なき教師、ムラ・ナスレデインが次のようにくりかえすのも、それなりの理由があつてのことである。

「どこに住もうと、手をあぶらで汚さないことには「わいろを使わない」とには」 まともに暮らせないばかりか、息さえできない」

人々のまつたくの馬鹿さかげんから地球の賢者と呼ばれるようになった別の人、チル・オイレンシュピーゲルも、次のように言つている。

「あぶらささねば車は行かず」

幾世紀にもわたる人々の集団生活のなかで形成されてきた、これらたくさんの格言を知つてゐる私は、まさにベルゼバブ先生その人の手を「あぶらで汚す」ことに決意した。みなさんも「存じのとおり、ベルゼバブ先生は、何のためにあれ惜しみなく費やすことができるほどの大量の可能性と知識をお持ちになつていらつしやるのだ。

もう十分だ！ 冗談は、哲学的冗談も含めてすべてやめにしよう。さんざん横道にそれたおかげで、どうやら私は、自分のなかに骨を折つて作りあげた重要な原則……この新たな職業を通じて自分の夢を現実にするために私が考案したシステムの基盤となるべき重要な原則のひとつを破つてしまつたようだ。つまり、現代の読者の精神機能の衰えを常に考慮し、短い間にあまりにもたくさんと考えを提供することで読者を疲れさせないように注意するという原則である。

そればかりではない。いつも私のまわりにたむろする「どうしても土足のままで天国に入りたい」連中のひとりに、この前書きのなかですでに書きあ

がつた部分を最初から最後まで朗読させてみた」とがあつたのだが、「このいわゆる「私」がそのときに疑いの余地なく観察し、認識したこととして、この前書きを読むだけで、あらゆる読者の内側には、私個人に対する頑固な反感を自動的に引き起こす「何か」が生まれてしまうのだ。もちろん、このようなことを私が認識できたのは、過去の歳月において私独自の精神に形成されて搖るぎないものとなつた素材のおかげ……他のさまざまな能力に加えて、自分と同類ではあるが自分とはタイプの異なる者たちの心理を理解する能力の獲得に役立つ各種の素材のおかげである。

しかし、ほんとうのところを言うと、いまの私がおおいに悩んでいるのはこの認識のせいではない。私を悩ませるのはむしろ、この朗読の後に私に生まれた次のような自覚である。私自身の全体——ふつうに言うところの「私」というのはそのちっぽけな一部にすぎない——が、この章に盛り込まれたさまざまの考え方を通じてその力を發揮するなか、私は自分がとりわけ尊敬する万人の教師ムラ・ナスレデインの基本的ないましめの言葉のひとつである「蜂の巣に棒を突っ込むことなれ」という言葉の主旨に完全にそむいてしまつた。

読者のなかには私への反感が生まれざるをえないという認識が私の感情的部分の全体にもたらした動搖は、「どんな侮辱でも時がたてば忘れ去られる」という古いロシアの格言を思い出した瞬間に、たちまち収まってしまった。しかし、ムラ・ナスレデインのいましめの言葉にそむいてしまつたという自覚が私にもたらした動搖は、今でも私をひどく悩ませるばかりか、これを自覚した瞬間に私が最近知ることになつた「二つのソウル」の両方で異常なかゆみとして始まつたとても奇妙なプロセスは、それでなくとも過労ぎみの私の太陽神経叢の右半分の少し下のところに、耐えがたい痛みを引き起こしている。

いや……待つた！ このプロセスもじつやら終わりかけているようだ。そして早くも、私の意識のあらゆる階層には——さしあたって言わせてもらえば「下意識のそのまた下」においてさえ——このプロセスが完全に終わろうとしているのを私に確信させるに十分な認識が生まれつつある。これは、人

生の知恵を秘めたもうひとつ的小話を私が思い出し、それが私の精神を次のような思いへと導いたからである……たとえ私のしたことが、わが敬愛するムラ・ナスレデインの助言にほんとうに反するものだったとしても、それでもなお、私のしたことははからずも、あのとてもすぐれた感受性をもつた、地球のどこでも知られているとはいえないにせよ、それでも一度でも会つたことのある者にはけつして忘れるうことのできない珠玉のような人物、チフリス*のカラペツトが発見した原則に沿つたものであつたのではなかつたのかと。

*訳注：チフリスはジョージア（グルジア）の首都トビリシの別名。

もうやむをえない……。この前書きはすでにこんなに長くなってしまつているのだから、私がこのきわめてすぐれた感受性をもつたチフリスのカラペツトについてもお話しし、それがもう少しばかり長くなつたからといって、どうしたというのだ。

まず言つておくと、およそ三十年から三十五年ほど前、チフリス鉄道駅には「汽笛」が据えられていた。

それは毎朝、鉄道労働者や駅員を起こすために鳴らされていたのだが、チフリス駅は丘の上にあつたので、その音はほとんど町中に響きわたり、鉄道労働者ばかりか、チフリスのあらゆる市民の目を覚ますのだった。

記憶によれば、チフリスの地方政府さえもが鉄道当局に書簡をしたため、平和に暮らすチフリス市民の朝の眠りを妨害せぬように要請したこともあつた。

毎朝その汽笛に蒸気を送り込むのが、駅に雇われたこのカラペツトの仕事だつた。

そして毎朝、カラペツトは汽笛に蒸気を送るための繩を引きにやつてくるのだったが、彼は繩に手をかける前に両手を四方八方にふりかざし、厳肅に、まるでモハメッド教の聖職者がモスクの尖塔で呼ばわるかのように、次のように叫ぶのだった。

「おまえのおふくろは××××。おまえのおやじも××××。おまえのじ
じいまで××××。おまえの田ん玉も、耳も、鼻も、脾臓も、肝臓も、魚の
目も……」

早い話が、彼は知っているかぎりのあらゆる悪態をついて、それが終わら
ないことに繩を引こうとしなかつた。

「」のカラペツトと、彼のこのようない習慣について耳にした私は、ある晩のこと、一日の仕事を終えた後に、「ジョージア東部」カヘティア産のワインを入れた小さな皮袋を携えてカラペツトを訪ねた。そしてこの地方では欠かすことのできないものとされている厳粛な「乾杯の儀式」を済ませた後に、私は——もちろん、失礼ではないやりかたで、かつこの地方の複雑な「礼儀作法」に従つて——その奇妙な習慣のわけを尋ねた。

ひといきにグラスを空け、有名なジョージアの歌であり、酒の席には欠かせないものとされている『おれたちは酔っぱらいじゃない』を一回歌つた後、彼は愉快げに、まず次のようない言葉をもつて私の質問に答へだした。

「おまえさんは近ごろの連中とは違い、ただ体裁のためにではなく、本当に誠実さをもつて酒をお飲みなさる。そこでわしにはわかるのだが、おまえさんは、わしが知つている技師や専門家どもとは違い、ただの好奇心からではなく、本物の知識欲から、わしの習慣についてご存知になりたいのだろう。そこでわしは、わしをこのようない奇妙な行動へと導き、だんだんにそれを習慣として確立することとなつた、内面における『細心の配慮』の本当の理由について、おまえさんに心から話したいと思い、また、そうすることがわしの義務ではないかとまで思うのだ」

彼はさらに言つた。

「わしのかつての仕事は、この駅で夜の間に蒸気釜を掃除することだった。
だが、あの汽笛がはじめて駅に据えられたとき、駅長は、わしのような年寄

りがそれまでのようない重労働を続けるのは無理だらうと考えてに違ひないの
だが、それからはただ、汽笛に蒸気を送り込むことだけを仕事とするよう、
そしてそのためには、毎朝、毎晩、規則正しく決められた時間にやつてくるよ
う、わしに命じた。

この新しい仕事を始めて最初の週のある日のこと、仕事を終えてから一、二時間というものの、なんとなく落ち着かない気分になることに気づいた。その奇妙な感覚は日々に強まり、ついには、はつきりした本能的不快感となり、おかげでマホーク*への食欲まで失つてしまつようになると、わしはその原因を知ろうとして、くりかえし考えるようになつた。これについてわしは眞剣に考え、それもどうしたわけか、仕事の行き帰りにはとりわけ熱心に考えたのだが、どんなにがんばつたところで、そのおおよその原因さえわからなかつた。

*訳注：「マホーク」はアルメニアのスープ。ふすまとかぼちやを使つたゼラチン状のすっぽいスープ。

そのようにしてほとんど二年が過ぎ、汽笛の綱で手の平にできたたこがとても固くなつてきたころ、ついにわしは、まつたくの偶然によつて、その不快感の原因を突如として理解した。

わしの正確な理解のきっかけとなり、この問題についての確信がわしのなかに形成されるための衝撃となつたのは、これから話す、かなり奇妙な状況で、わしがたまたま耳にした叫び声だつた。

ある朝のことだつた。前の晩の前半を、近所の知り合いに生まれた九番目の娘の洗礼の儀式に費やし、そして後半を、たまたま手に入れた『夢と魔術』という、とてもおもしろくて珍しい本を読んで過ごしたために寝不足のわしは、汽笛を鳴らしに道を急いでいく途中、たまたまある曲がり角で、地方政府の仕事をしている知り合いの床屋外科医*にばつたりでくわした。見ると奴は、こっちに来るなど、身振りをもつて、わしに懇願している。

*訳注：「床屋外科医」＝簡単な外科施術も行なう床屋

わしの友だちである、この床屋外科医の仕事は、決まつた時間に助手を連れて、特製の車を引きながら町を巡回し、市当局が納税のときに配布する金

属製の鑑札を首輪に付けていない犬どもをかたづかまえて、屠殺場に連れていくことだ。犬どもは、それから二週間の間、市の費用で屠殺場の屑物を食べて生かされる。だが、その間に飼い主が名乗りでて決められた税金を払わないようなら、犬どもは、なにやらいかめしい雰囲気のなかで、じかに特製のオーブンにつながっている滑り台の上に放り出されるのだ。

しばらくして、この名高い氣の利いたオーブンの反対側の口が小気味よい「ぼ」ぼという音をたてると、町の石鹼業者のおやじどものふところを肥やし、またおそらくは他の用途にも使われるに違いない、透明ですばらしく清潔な一定量の脂肪が流れ出し、次にそれに劣らず耳に心地よいさらさらとう音といつしょに、とても優秀な肥料として利用されるかなりの量の物質が吐き出される。

さて、わしの友だちの床屋外科医は、次のような、単純で、驚くほど手際のよいやりかたで犬を捕まえていた。

奴はまず、どこからか、大きな、古い、何のへんてつもない漁網を仕入れてきた。そして万人の幸福のためにわしらの町のスマラム街の風変わりな巡回にでかける際には、それを上手にたたんで、頑丈な両肩にかついでいった。

そして『パスポート』を持たない犬が、イヌ族にとって恐るべき、なんでもお見通しの両眼の視野に入つてくると、あわてることなく、豹のようになめらかにそつと近づき、犬が何かおもしろいものを見つけて気を取られている隙に網を投げ、すばやくたぐりよせる。そして、車を引き寄せ、所定の方法で網をはずすと、そのときには犬はまんまと車のおりに入っているという寸法だ。

わしに来るなど身振りしたとき、この床屋外科医は、格好の隙をとらえ、尻尾をふりふり雌犬を見ていて次の犠牲者に網の狙いをつけているところだった。ところが、このわしの友だちが網を投げようとしたまさにそのとき、近所の教会が、突然、人々に早朝の礼拝を呼びかける鐘を鳴らしだした。早晨のじまを破る鐘の音に肝をつぶしたその犬は、よこつとびに跳ねると、からつぽの通りをイヌ族の最高速度でぶつとんでいった。

「この床屋外科医は怒ったのなんの、腋毛も含めた全身の毛を逆立たせると、

網を路上に叩きつけ、左の肩^シしに唾を吐くと、大声で叫んだ。

『こんちくしよう！ なんてときに鳴らすんだ！』

その叫びがわしの思考器官に到達した瞬間、わしの思考器官にはさまざまな考えが群れをなして集まってきた。そして、わしが思うには、これらのさまざまな考えこそが、先に触れたような本能的不快感がどうしてわしのなかで進行したかについての正確な理解をもたらしたのだ。

わしはその瞬間、これほど単純で明白な理由がそれまで頭に浮かんでこなかつたという事実によって侮辱されたかのように感じさえした。

そのときのわしが、わしの存在のすべてをもつて感じたのは、わしが皆の生活に及ぼしてきた影響のことを考えれば、先ほど言つたような現象が私の起きたのはまったくあたりまえだということだ。

まつたくの話、わしの汽笛の騒音で朝の甘美な眠りを破られた連中がひとり残らず、その地獄のような大音声の原因であるこのわしを『日のもとのすべて』をもつて呪わないわけではなく、その結果として当然ながら、ありとあらゆる惡意をはらんだ振動が、四方八方から、わし個人へと流れ込んでいるに違いないのだ。

この記念すべき朝、仕事を終えた後にいつものように暗い気分になつたわしは、近所の食堂で二ソニク入りのハチ「イングのナンに似たジョージアのパン」を食べながら、さらに考えつづけた。そしてわしの出した結論は、もしもわしがあらかじめ、前の晩に読んだ本に説明されているとおりに、わしが一部の人々のためにしているこの仕事を迷惑と思いかねないような連中をひとまとめにして呪つておけば、「白痴の領域に横たわる輩」と呼ばれるにふさわしいような、つまり半分眠つたこれらの連中がたとえわしを呪つたところで——やはり同じ本の説明によれば——わしには痛くもかゆくもなかろうということだ。

そして実際、それを実行して以来、先に触れたような本能的不快感は、さっぱり感じられなくなつたのだ

さあ、やつと、わが我慢づよい読者よ、私がほんとうにこの前書きの章をしみくらねばならないときがきた。あとは署名するだけだ。私^シと……

いや待った！ 気をつけなければ！ 署名に冗談は許されない。さもないと、かつて中央ヨーロッパのある帝国で、実際には三ヶ月しか住まなかつた家のために十年分の家賃を払わされた男のようになるかもしれない。その男がそんなはめに陥ったのも、その家の契約を年ごとに更新することをうたつた紙一枚に署名してしまったからだつた。

もちろん今回ばかりではなく、人生における他の場合においても、私は常に、署名にあたつては十分すぎるほどに気をつけなければならない。

よろしい。では。

私こと、幼年時代には「タターカ」、青年時代の初期には「ダーキイ」、その次には「黒いギリシャ人」、壯年時代には「トルキスタンの虎」と呼ばれ、今でもありふれた「だれかさん」ではなく、本物の「ムツシュー」または「ミスター」グルジエフ、あるいは「ムクランスキ公爵」の甥、そしてたんに「舞踊教師」と呼ばれし者。